

(6) 廃棄物

36 - 01 p.99、ごみ処理施設の整備状況で尾張東部衛生組合のごみ焼却施設、粗大ごみ処理施設だけをふれているが、最終処分場の危機的状況にもふれるべきである。ごみを燃やせば無くなるのではなく、最後は埋立処分が必要になる。尾張東部衛生組合の最終処分場は、埋立容量 72.2 万 m³ で昭和 44 年に作られた古い構造であり地下水汚染が懸念されている。さらに、来年ぐらいには満杯になる。こんなことで万博のごみ毎日 50 t を処理できるのか。

36 - 02 p.99、万博のごみは一般廃棄物のため、市町村が処理計画に位置づけ適正に処理する必要があるが、長久手町の意向は確認したのか。それとも、事業系一般廃棄物だから長久手町は受け入れず、協会が他市町村の処理施設を探しまわること考えているのか。

36 - 03 廃棄物処理についての具体的な処理方法が示されていないのが不安である。

報告書では、尾張東部衛生組合の平成 10 年資料を使っているが、長久手町は年々人口が急増しており、2005 年までのゴミ量の増加予測もせず、処理能力に余裕があるかのごとき判断は間違いである。

36 - 04 廃棄物をどこで、どのように処理するのか、どのように搬出するのか等、具体的に明示すべきと考えます。早急に具体策を出し、その予測・評価をすべきです。

《 見 解 》

廃棄物処理は、第一に発生抑制、次いで再使用・再資源化の実施等により、最終的に処理せざるを得ない廃棄物量を極力減らす検討を進めてまいります。

また、処理せざるを得ない廃棄物については、地元自治体、一部事務組合等と協議し、可能な協力を得るとともに、必要に応じて廃棄物処理業者に委託するなど、適切に対応してまいります。

36 - 05 p.100、会場内で発生が見込まれる廃棄物の種類だけが示されているが、その内訳ごとの発生量の見込みを明記すべきである。それがなければ、具体的なごみ減量計画も作成できないはずである。

36 - 06 p.100、廃棄物の発生量 1 人 1 日あたり 457 g の根拠を明記すべきである。過去の博覧会は推計値しかないのか、実績ぐらいい残っているのではないのか。施設の利用方法が類似していると思われるテーマパーク等とはどこのことか、そのときの実績は。

《 見 解 》

廃棄物の発生量については、過去の博覧会（国際科学技術博覧会、国際花と緑の博覧会など）のデータや、類似していると思われるテーマパーク（ハウステンボスなど）等の調査結果を参考として推測しております。

また、全体の発生原単位は 457 g/人日であり、その内訳は、生ごみ 115 g/人日、紙類・その他 141 g 人日、古紙 11 g 人日、段ボール 77 g 人日、びん・缶 42 g 人日、廃プラスチック 53 g 人日、ペットボトル 3 g 人日、廃油 14 g 人日と推測しております。

36 - 07 p.100、廃棄物の問題が、会期中に限ってあるが、建設工事、解体工事の廃棄物も膨大になるはずであり、その発生量と対策、再利用など検討すべきである。

《 見 解 》

工事中の廃棄物については、具体的な計画を策定していく過程で、建設工事、撤去の各段階において廃棄物発生量の最小化を目標に検討を進めてまいります。また、廃棄物の再資源化については、周辺のリサイクル事業状況を把握し、廃棄物の種類に応じた適切な計画となるよう検討を進めてまいります。